

貞操逆転世界の腐女子の日常

月詠之人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目立った特徴もなく、特技もないただの腐女子の主人公。そんな彼女が死後、転生した世界は男女の貞操観念が逆転した世界だった。

山も落ちも意味もない。そんな彼女の日常をグダグダと書き綴ったものです。過度な期待はしないでください。

とある人の作品を読んでいたら思い付いた落書きです。軽文ストレイドツグスの更新が優先なので、完全不定期更新です。思い立ったら書くスタイル。

c a s e 2 | 7

c a s e 1 | 1

目次

我輩は腐女子である。名前はまだない……いや、あるけど、この物語を読むにあたっては、私の名前など些事に過ぎないので割愛したい。不満のある方は腐女子でも喪女子でも好きに呼ぶといい。……いや、まって、自分で言っておいてなんだけど、喪女子はやめよう。私の精神衛生上よろしくない。せめて地味子で……いや、私は眼鏡かけてないし、あんなに可愛くないし、おっ〇いも大きくないな……。いやいや、そう考えるとあの女全然地味じゃないじゃん！ 私を含む全地味女に謝るべきだ！ ん？ 腐女子が俺妹観てて悪いか。言っておくけど、腐女子って生き物はその気になればT.O.L.O.V.EるでもB.L妄想できるんだよ？ 推しは遊(小手川兄)リト。次点でリトザス。ザスリトではないリトザス。順番は大事だ。でも、声を聞くとザステイン攻めじゃね？ ってなる。やはり、子安は偉大だということか。

話が盛大に逸れた。ついつい話が脱線してしまうのは私の悪い癖だ。私の名前の話だったか？ では、仮に都と読んでくれ。私の好きなB.L小説家の名前だ。……と、いいつつ、純ロマのノベライズしか読んでないけど。ちなみにエゴイスト派。テロリストは教授が受けなら全力で応援した。いや、好きだけどね。

さて、簡易的な自己紹介も済んだところで、私の置かれている状況を説明するとだ。私は今、貞操観念が逆転した世界にきている。別に、「そうだ、京都に行こう」的なノリで来てしまった訳ではない。早い話が異世界転生である。普通ならここから私の独白による私の過去が語られるわけだが、語るべき重要な過去を持っているわけでもないの割愛。なんか死んだ↓転生した↓おまけにアラサー独身派遣社員だったはずが、JKになっていた。この程度の認識を持っていてくれれば大丈夫だ。初めは、「転生物k t k r！ 俺t u e e eできんの!？」と思ったものだが、残念ながら何の特典も貰ってないらしく、特殊能力も神器もなければ、スペックも私のJK時代のままだった。

まあ、若返っただけでもよしとしよう。そもそも、見た感じ普通の現代日本で、俺 t u e e をしても微妙だ。

普通とは言ってみたが、この世界、普通とは違うところが一つある。前述の通り、貞操観念が逆転しているのだ。なるほど分かんという方は「貞操観念逆転世界」でググってみよう。ビツクリするくらい男性向けエロマンガが出てくるから。……私も最初はビビったよ。簡単に説明すると、文字の通りとなってしまう。普通の世界だと童貞がクラスの女子に鼻息荒くするのに対して、こちらは処女がクラスの男子に対して同じ反応をする。他にも、男子がみだりに肌を見せたりしないとか、風俗は女が金を払って男を買ったりとか、女子が男子をいやらしい眼で見て「これだから女子は……」とか男子が言ったりとか、コンビニのエロ本コーナーに男の裸の表紙が並んでいたりとかそんな感じだ。男性向け作品の内容としてはそんな世界でビツチになって、女共と○りまくるといった内容。……前半だけ聞くとすごいBL臭。堅物男子×ビツチ系男子で一本書けそうだ。ビツチ君誘い受け……余裕でありありです。まあ、それは置いてだ。先の男性向けの内容、これには一つ大きな欠点がある。簡単な話だ※ただし、イケメンに限るという奴だ。まあ、イケメンとまでは言わないが、最低ラインの基準値は満たしていないといけない。男子諸君、考えてもみたまえ、ぽっちゃり（オブラート）で個性的（オブラートその2）な顔立ちの女性に「あたしのこと、好きにしているのよ」とか言われても食指は伸びないだろう？ 私だって抱かれるならイケメンに抱かれたい。……この世界だと、私が抱く側か。まあ、それは置いておこう。喪女×イケメンとか誰得だし。

遠回しになったが、私が言いたいのはこの世界は転生したところで、性欲旺盛な、一定基準値を満たす外見の男子でないと楽しめないのだ。という事だ。

ただし、腐女子は違う。あえて言わせてもらおう、この世界を真の意味で楽しめるのは腐女子なのだ。この発言を聞いて、目立たない女の子が努力して女子力（C）を研ぎ、逆ハーレムを作る展開を想像した人、残念、貴方の腐女子力はたったの5です。腐女子力53万の

私には勝てません。……なんだよ、腐女子力って。世界一いらぬ力だ。まあ、腐女子力の話は置いて、この貞操逆転世界、貞操観念が逆転したことにより辻褃合わせで色々な事が変わっている。例えばアニメや漫画などのサブカルチャーだ。元の世界で日常系のアニメと言え、女の子同士がイチャイチャワチャワチャやってるものだが、この世界においては男子同士がイチャイチャワチャワチャやっていたりする。……この世界にきて、本当に良かったと思った。男子軽音部員達がイチャイチャしたり、喫茶店員(♂)達がワチャワチャしたり……けしからん、もつとやれ！ 他にも、いわゆるラツキースケベと呼ばれる類いも、女子が男子更衣室の扉を開けてしまったり、女子が男子を押し倒したりと大変なことになっている。

みんな大好き閑話休題。

つまり、何が言いたいのかと言うと、その辻褃合わせの結果、腐女子^{わたし}垂涎の事態が多々起こるのだ。前振りが長くなってしまったが、そのいくつかの例を上げるのが、この話の本筋^{作品}である。

case 1: クラスの男子

今日も今日とてお昼休みに男子をウキウキウオツチング……若い子通じるかな？ ビッチ的な意味ではない、あんな発情した雌共と一緒ににしないでいただきたい。男とニヤンニヤン(意味深)したいのではない、男同士がニヤンニヤン(意味深)しているところが見たいだけなのだ！ ……こっちのほうが性質^{たち}悪いな。

「都！ 昨日のアニメ見た？ 主人公のバニーボーイ姿、エロかったよね」

ぐふふと気持ち悪い笑みを浮かべながら深夜アニメの話題を振ってくる我が友人。うん、エロかった。だけど、私としては狙いすぎかなとも思ったよ。製作者側は、もう少しチラリズムの良さを知った方がいい。最近の私の推しは禪チラ。浴衣や法被が翻った瞬間に見える禪と、鍛え上げられた大腿筋。受けだと良し、CP相手が年下だと

なお良し。是非とも宗三左文字さん辺りにやってほしい。その辺りをふまえて友人に話すと、

「流石は都……あたしの上に行く変態淑女だね」

と言われた。それは誉めているのか？ 普通だろ禪チラ。そんなこんなでアニメの男性キャラのエロスについて語っていたら、近くでお弁当を食べていた男子が、気持ち悪い物を見るような眼で見ていることに気付いた。例えるならば、台所付近によく出るアレを見るような眼。生意気にもアイツは夏の季語である。歳時記にも載っている。そんな視線を向けてくる彼は、クラス委員の鶴瀬君だ。知的な黒縁眼鏡に良く手入れのされた艶のある黒髪、キツそうなつり目と白い肌。背は高いが細身で、インテリイケメンの雰囲気だ。

「……まったく、これだから女子は品がない」

……テンプレ頂きました。本人としては小声で言っただつてもりだらうけど、私の地獄耳は誤魔化せないぜ。……アラサーだと言うのに、いまだに中二病が抜けないな。いやいや、今の私は花の女子高生だった。……女子高生でもアウトか……。アニメだつたら可愛いのにね。

しかし、品がないとききましたか。お坊ちゃん感がある台詞ですね。結構いいとこのご子息様なのかしら。

「あはは、女の子だもん、しょうがないよ」

そういつて笑うのは彼の隣にいる藤見野君である。ふわふわと柔らかそうな茶髪に、柔和な顔立ち。あれでいてバスケ部のホープというなかなかのスペックを持っている。ずいぶんと対照的な二人だが、だからこそカップリングというのは萌えるものだ。……藤鶴か鶴藤かそれが問題だ。

さて、突然だけでも、ここでパーソナルスペースについて話をしたい。パーソナルスペースというのは人に近付かれると不快に思う範囲のことで、一般的には女性よりも男性の方が広いとされている（Wikipediaより抜粋）。つまりは、男性よりも女性の方が他人との距離が近いのだ。……しかし、この世界では違う。貞操観念の逆転により、このパーソナルスペースに関しても変化がある。ようは、男子同士の距離が近い！ あの二人、顔がかなり近い！ 内緒話をす

る距離感、後ろからちよつと押されれば唇が触れ合ってしまいそうである。というか、してしまえよキス！

「ね、ねえ、俺達、見られてない？」

「む、確かに……」

おや、バレてしまいましたね。そりやバレるわな、ガン見だもん私。

「聞こえちやったんじゃないかな？ 謝った方がいいかも」

「……ふん、教室であんな話をしている方が悪い」

「でも、陰口は良くないよ、ね」

そういつて、笑顔で人差し指を鶴瀬君の鼻に当てる藤見野君。ヨツシヤ、キタアー！ 内心でガッツポーズをきめる私。ほんわかタイプがしつかり者をたしなめる。王道と言えば王道！ しかし、王道こそが正道なのよ！ ベタはベターなんかじゃない、ベストだ！ そして、さりげない、ちよつとしたスキンシップ。完璧よ、藤見野君。よし決めた。藤鶴だ。エリートタイプの鶴瀬君は押しに弱いだろうし、藤見野君のあのほんわかオーラを断り切れないだろう。……いや、意外と藤見野君が腹黒キャラという線もあるか。どっちにしる鶴瀬君受けは変わらんけどね。

そんなこんなで、二人のカップリングについて考察を深めていると、件の二人がこちらに向かってきた。

「ゴメンね、聞こえてた？」

申し訳なさそうな表情も good ですよ藤見野君。まあ、聞こえてましたが、気にもしていません。そう伝えると、二人とも幾分かホツとした表情になる。そして、二人顔を見合わせるとクスリツと笑う。何だ、今の意味深なアイコンタクトは?! 目と目で通じ合う仲なのかい？ これまた古いな、若い子どもころか私の世代でも通じるか怪しい。

「意外と優しいんだね」

はて？ 私が優しい？ 何のことやら。二人を、と言うか鶴瀬君の陰口を咎めなかったのは、二人で怪しい妄想をしてしまった罪悪感だ。だから、これは優しさなどではない。自分をクズだクズだと普段から卑下している私でも、流石にこれで彼にいちやもんをつけるよう

なことはしない。それをしてしまったらクス以下だ。腐女子の風上にも置けなくなってしまう。……ただ、意外とは失礼じゃないだろうか。

「まあ、陰口に関しては此方に非があるが、教室で品のない発言は慎みたまえ」

そういつて鶴瀬君は自分の席に戻っていく。それを見て、肩を竦める藤見野君。

「もう、拓巳の奴……。ゴメンね、口は悪いけど、良い奴なんだよ」

相方のフォローを忘れない姿勢に愛を感じます。というか鶴瀬君、拓巳って名前なのね。知らなかったわ。

私が気にしていない事を告げると、藤見野君はニツコリ笑ってから鶴瀬君のもとに向かう。素敵なスマイルだけど、向けるのは鶴瀬君にお願いします。そのほんわかイケメンスマイルに、隣にいる友人があらわれていたが、気にせず二人の観察に戻る。今度は気付かれないように、横目でチラチラと。二人のイチヤイチャを堪能する。近いなあ、心なしかボデイタッチも多いし。やっぱデキてるんじゃないか？

——チラ見もバレていたらしく、後で藤見野君にたしなめられたのは別の話。

やあやあ、随分とお久し振りになってしまいましたとメタ発言。腐の伝道師、みんなの都ちゃんですよ。……うん、誰だよコイツ。久し振りすぎて完全に自分のキャラを見失ってらっしゃる私。まあ、私のキャラなんてどうでもいいだろう。誰も興味はないだろうし、この話には何の関係もないのだから。^{ものがたり}

時は放課後。陽は既に西に傾いて、ハーモニカでセルフBGMを演奏しながら、満足を忘れた満足さんが歩いて来そうな茜空だ。そんな教室の中でしばらく雑談を交わす。しかしまあ、会話の下ネタ率の高いこと高いこと。ウブでネンネというわけでもないから、普通に返すけれど、元の世界での高校生男子ってこんな感じなんだろうか？ 五回に一回くらいのペースで下ネタが飛び出してるわよこの娘。……いや、コイツが特殊なんだよね。なんなら、それに普通に返答してしまう私も特殊なんだろう。英語で言うトスペシャルだと、某ラノベ主人公は言っていたが、正直誇れる気はしないな、うん。そんな彼は絶対に受け。戸塚きゅん相手でも絶対に受け。ちなみに私は戸部八派。マイナーカプ好きは辛い、主に供給の少なさと言う点において。

そんな変態淑女たる相方と語らい会うのは楽しくもあり、何処か切なくもある。私は知っているのだ。この時間は永遠なんかじゃなく、短く儂く、取り返しのつかないものだ。あと数年もして、社会に出て、仕事に忙殺されるようになればこうして下らないお喋りに興じる時間は少なくなるのだ……少しおセンチになりすぎたようだ。ほら、相方が怪訝な表情で私を見ている。何でもないと言っていると、私はカバンをもって立ち上がる。部活に行こう。そう声を掛けると、彼女もまたカバンを手にして立ち上がる。短く儂いものだとは知っていたても、楽しまない理由にはならないし、なによりそんなのは私のキャラじゃない。昨日見たアニメのキャラのカップリングを話す方が億倍建設的である。……何を建設するのだろうか？ キマシタワ？ いや、あれは元々は百合用語だったかな？ とまああれ、新米刑事とベテラン刑事のアニメの話をしながら部室に向かう道す

がら、見覚えのある二人組を見つけて足を止める。

ー藤鶴だ。

おっと失礼、藤見野君と鶴瀬君だった。二人してスマホを片手に何かを話している。一見すればなんてことのない日常的青春の1ページ。だが、私の持つ地獄眼ヘルズアイと婦女子フィルターを持つてすればそんな物は一瞬にして薔薇色空間に変わるのだ。……目ざとい事を地獄眼とは言わないだろうか。

case 2：お揃い

皆さんはお揃いの物を身に付けることにどういう意味合いを持つだろうか？ 私がまだ少女だったころ、当時の友人とお揃いの小物を買って身に付けたりもしたものだ。端から見れば微笑ましく映るだろうか？ そういう仲良しアピールは女子にとっては重要で、私達は仲良しですよと周りに喧伝するのだ。ただ単に仲のよさをアピールするだけなら微笑ましくもあるのだろうが、其処には多くの意味合いが含まれる。友情の所有権や裏切りの防止、気に食わないあの子への牽制など理由は様々。一番恐いのは、当人達にその意識はなく、本当に友人との友情の証だと思って身に付けていることである。

さて、女子社会の黒い所は置いといて、やはりお揃いの物を身に付けるということは仲が良くなければあり得ない。つまりはどういう事かと言うと、私の地獄眼は捉えてしまったのだよ、二人のスマホに揺れるお揃いのストラップを。バスケットボールのようなものに手足と顔をくっ付けただけの雑なデザインのキャラクターは可愛いとは言いがたく、しかし妙な愛嬌もあつて憎めない不思議なゆるキャラ感を演出していた。

そろりそろりと近寄って、二人の会話に耳を澄ませる私を見て、相方が先程とは違う意味で怪訝な表情を浮かべて見せる。……というより不審者を見る眼ですね、わかりません。

「……全く、何処で買ってくるんだこんなもの？」

「とか言いつつも、ちゃんと付けてくれるあたり、拓巳らしいよね」

まさかの藤見野君からのプレゼントらしい。まあ、藤見野君はバスケットだし、なんとなく分からなくもないか。手にしたスマホに揺れるバスケットボールマンは西陽に照らされて少し赤い。同じく少し赤くなっている二人の間に流れる空気がちよっぴりセンチメンタリズムなのは、季節的にか時間帯的にか人をそういう気持ちにさせてしまうものなのだろう。

「……久しぶりだな、こういう風に同じものを身に付けるのは」

少し眼を伏せながら言う鶴瀬君に、藤見野君が柔らかく微笑む。

「小学校以来かな？ いつもなにか同じものを持ってたよね、鉛筆か消しゴムか、キーホルダーか」

まさかの幼馴染み設定に私、大・興・奮！ 何処までベタなのだこの二人は！ ベタはベストという座右の銘を持つ私は当然ながら幼馴染み物も大好物ですから。……しかし、マイナーカプを好きになっってしまう事がちよいちよいあるのはどういう事だろうか？ まあ、心の琴線に触れてしまったものは仕方がないだろう、山崎×新八とかもつと増えないかなあ……5年後新八の下克上込みで。などと下らないことを考えていると、藤見野君が楽しそうに笑い、鶴瀬君が奇妙なものを見る眼で彼を見る。

「……どうした急に？」

「いや、お揃いのキーホルダーをなくして、拓巳が泣いちゃった事を思い出してさ」

「な、泣いてなどいない！」

「泣いてたって。一緒に探してさ、見つかったときに二人してまた泣いてさ」

少し遠い眼をした藤見野君がスマホのバスケットボールマンに触れる。彼がなにを考えているのかは私には読み取れなかったが、幼馴染みたる鶴瀬君は何かを察したようで、少しためらいがちに友人の肩に手を置いた。いつもより、少し優しげで、だけど寂しげな表情だ。

「……今度は大事にする。ありがとう……遥」

「……………うん、ありがと拓巳」

「何故、お前が礼を言う」

「気にしない、気にしない……………ふふっ」

『都、都……………！』

小声で私を呼びながら揺さぶる相方によって意識を取り戻す私。いかんいかん、目の前で繰り広げられている光景の尊さに意識が持っていないかっていたようだ。いつの間にか出ていた鼻血をハンカチで拭くと、相方に向き直り礼を言う。しかし、彼女の視線は私の後ろに固定され茜空のせいで赤く染まっているはずの顔は妙に青ざめていた。「……………そこをなにをしている？」

半端ない威圧感を感じる声に振り向くと、額に青筋を浮かべた鶴瀬君が立っていた。イケメンが怒っている姿というのは素直に恐いものである。その後ろには気恥ずかしそうに頬をそめて、困ったような表情を浮かべる藤見野君。なにその表情、エロい。

「盗み聞きとはいい趣味をしているようだな……………」

数秒後、土下座で謝る私と、説教をする鶴瀬君、それを宥める藤見野君と涙目で私と一緒に謝る相方というカオス空間に薔薇色空間は書き換えられているのだった。